

タイトル	ドラッカーと経済学：シュムペーターとケインズの評価をめぐって
著者	春日，賢； Kasuga, Satoshi
引用	北海学園大学経営論集，13(2)：1-12
発行日	2015-09-25

# ドラッカーと経済学

— シュムペーターとケインズの評価をめぐって —

春 日 賢

## はじめに

本稿の目的は、ドラッカーと経済学の関係を整理・検討することにある。

「ビジネス界に最も影響を与えた思想家」ともいわれるドラッカーは、もとより経済学者ではない。「望ましい社会」の実現をめざす彼の焦点は、「人と社会のあり方」にある。とはいえ、彼に経済学的な素養がなかったわけではない。むしろ経済学的な知見に接する機会にきわめて恵まれていた。そもそも父アドルフは貿易省・大蔵省の官僚で経済学者であったし、この父こそがかの経済学者シュムペーターを見出し、世に送り出した張本人でもあった。ユダヤ系でオーストリアのフリーメーソンの長（グランド・マスター）でもあったこの父のもと、自宅にはかかるシュムペーターやハイエクなどユダヤ系の経済学者も訪れていた。ドラッカー自身も 1942 年に大学に籍を置くまでの職業遍歴において、証券アナリストや経済記者、マーチャント・バンカーになっており、この間、金融・景気など経済に関する論文もいくつか著わしていた<sup>1</sup>。大学での講義では、経済と統計を受け持ったこともあるという<sup>2</sup>。経済学への通暁ぶりは、それこそ玄人はだしであった。

けれども終生ドラッカーは、経済学を専門とすることはなかった。こと経済学についていえば、ドラッカーは「非経済学者」をもって自らを任じた。事実上の処女作『経済人の終わり』（39）では、従来の「人と社会のあり方」が経済関係のみに集約されてしまう「経済至上主義社会」（economic society）であるとして限界を指摘し、その崩壊しゆく運命を宣言した。もとよりそこにある認識は経済によって「人と社会のあり方」をとらえるアプローチ、すなわち経済学の非有効化さらには有害化にほかならなかった。いわば同書は、社会科学としての経済学に対する死亡宣告の書でもあったのである。かくして彼はこれからの「望ましい社会」を「非経済至上主義社会」（noneconomic society）としてその実現をめざし、経済学にかわるアプローチとしてマネジメントを編み出していくのである。

このように経済学への根本的批判とそこからの脱却が、ドラッカー社会思想そもその出発点であった。しかし他方で、その後の彼が並々ならぬ関心をもって、経済学を注視しつづけたのもまた事実である。実に、「非経済学者」ドラッカーの経済学のアつかい方はきわめて微妙であった。そこで本稿では彼の経済学観を端的に表明している「シュムペーターとケインズ」（Schumpeter and Keynes）（83）をとりあげ、考察していくこととする。20 世紀を代表する二大経済学者を比較検討した同稿は、経済学的な思考・手法に関するドラッカーのとらえ方をきわめて如実に表している。執筆時期はドラッカー後期にあたっており、とりわけ経済学とマネジ

メントを架橋しようとする点で目を引くものがある。同稿の考察によって、本稿ではドラッカーと経済学の関係の一端を浮き彫りにすることを課題とする。

## I

あらかじめドラッカーの経済学に対するスタンスを整理しておく、「非経済学」という大枠では終生一貫しているが、立ち入ってみれば時期によって異なっている。それはおよそ3つの時期に大別することができる。まず『経済人の終わり』(39)で、生涯の立場「非経済学」が表明された<sup>3</sup>。ここで意図されているのは「脱経済学」であった。非有効化・有害化した経済学にかわる新たな社会アプローチがもたらされたのである。そしてそれが『現代の経営』(=『マネジメントの実践』)(54)で、マネジメントとして結実することになる。実にかかるとマネジメントの土台は、シュムペーター的方法論にあることが見いだせる。ここからしだいに不確実性増す社会環境の変化にもなると、経済学の新しい課題とめざすべき方向性などについても頻繁に言及していくようになる。あくまでもマネジメントを主軸としながらも、経済学を並置させて相互補完的に位置づけていくのである。経済学に一定の有効性を認めつつ、それとの関係から「非経済学」すなわちマネジメントを展開していったのである。この段階においてシュムペーター的方法論は、マネジメントの土台というのみならず今後めざすべき方向性として前面にかかげられることになる。これはおよそ80年代以降の終生つづくこととなった。以上の「非経済学」の時期をまとめると、①「脱経済学」模索の時期、②「脱経済学」すなわち「非経済学」としてのマネジメント誕生・確立の時期、③マネジメントと経済学の併存、さらにシュムペーター的方法論への傾斜をより強めることでマネジメントを進化させた時期、ということになる。

ドラッカーの「非経済学」の原点は、およそケインズとの若き日のエピソードにもとめられるであろう。彼自身の回顧によれば、20代のロンドン滞在時、ケンブリッジ大学でケインズの講義を毎週聴講したが、そこでの焦点は商品の動きばかりだった。これに違和感を覚えたドラッカーは、自ら関心があるのは商品ではなく、人間や社会だということに気づいたというものである<sup>4</sup>。これは少年時代に隊列から外れ、運動そのものに違和感を覚えたという「傍観者ドラッカー」誕生のエピソードに似ている。まさにこの時、「非経済学者ドラッカー」が誕生したといつてよい。

論考「シュムペーターとケインズ」は、シュムペーターとケインズの生誕100年にあたる1983年に*Forbes*誌に掲載された。その後、『マネジメント・フロンティア』(86)および『すでに起こった未来』(=『生態学的なビジョン——アメリカの状況に関する描写』)(93)に転載されている。両著とも論文集ながら、後著は40年以上にわたる諸論考からドラッカー自身が選定したアンソロジー、しかもすべてが社会生態に関するものだとされる。彼がもっとも影響を受けたという哲学者キルケゴール、および自らの社会生態学に関する回想が書き下ろしとしてふくまれるなど、ドラッカー個人の思い入れがきわめて強いものとなっている。かかる同書の内容に選定されたという点で、同稿もまたドラッカーにとってひとときわ意義深いものであることは間違いない<sup>5</sup>。

執筆された1983年のアメリカはレーガン政権第1期に当たり、レーガノミクスの真つただ

中にある。そして政府支出(社会保障費と軍事費)の拡大・減税・規制緩和・インフレ収束を柱とする自由主義経済政策により、戦後最悪の不景気を脱した年であった。この頃には、戦後西側の経済政策の基盤であったケインズ経済学の限界と非有効性が露わとなっており、「ケインズは死んだ」とすでに喧伝されてもいた。当時のドラッカーはといえば、『見えざる革命』(76)で先んじて少子高齢化社会の危機を訴え、その克服のために生産性の向上を火急の課題としてかかかっていくようになっていった頃である。より具体的には『乱気流時代の経営』(80)で「知識労働者の生産性向上」を最重要課題とし、イノベーションに注目するのである。それが結実したのが、『イノベーションと企業家精神』(85)である。

「シュムペーターとケインズ」は、『すでに起こった未来』(93)では「第Ⅱ部 社会的様相としての経済学」に配されている。ここでは他に「アメリカ政治の経済的基盤」「経済理論の貧困」「利益の幻想」「ケインズ — 魔法のシステムとしての経済学」などの論考も収められている。同Ⅱ部のイントロでドラッカーはいう。経済学者たちと唯一見解が一致するのは、私ドラッカーが経済学者ではないということである、と。「胃袋があつてはじめて道徳がある」ともいわれるように、確かに「経済」は重要な領域である。けれども経済学の基本的な前提、「経済」を唯一の支配的な領域とする考え、さらには独立した領域であるということさえ、自分は受け入れることができない。政治や社会にかかわる意思決定すべてにおいて経済コストを考慮すべきということを確認に自分は強く主張してきたが、しかし利益のことだけを考えるのは無責任であり、いざれ災厄をもたらすとも考える。「経済」とは唯一ではなく、あるひとつの領域にすぎないのであって、経済的なニーズやその充足は重要ではあっても絶対ではない。そして何よりも「経済」とは、あくまでも非経済的な目的すなわち人間的・社会的な目的のための手段にすぎない、と強調するのである。

かくしてドラッカーはいう。経済学を独立した科学と認めることはできず、したがってやはり自分は経済学者ではない。しかしひるがえって、自分は経済学というものに強い関心をもっている。それは社会的な様相を示し、社会・政治的な問題の中核的な象徴であり、社会的な信条・価値を表現するものだからである。そして経済学にかかわる人々、すなわちシュムペーターとケインズのような偉大な経済学者に強い関心をもっている、と。ここにある視点は、「経済学によって社会をとらえる」のではなく、「社会をとらえるための有力な一手段として経済学を利用する」というものにほかならない。かくみるかぎりドラッカーの経済学に対するスタンスも、自身の焦点「人と社会のあり方」からのものであることが確認できるのである。実に彼はシュムペーターとケインズ、両者に師事したことがあるという。家族ぐるみで親交のあったシュムペーターはさておき、ケインズとのエピソードはまさに先ほど述べたものである。若き在英時代、毎週ケンブリッジ大学でケインズの講義を聴いたが、そこでの焦点は商品の動きばかりだった。これに違和感を覚えたドラッカーは、自ら関心があるのは人間や社会だということに気づいたというものである<sup>6</sup>。もとよりこのとらえ方は、「シュムペーターとケインズ」にも脈打っている。以下、実際に同稿へと目と転じていこう。

## II

「シュムペーターとケインズ」(83)冒頭で、ドラッカーはいう。シュムペーターとケインズは1883年生まれの同い年であるが、生誕100年にあたる今年1983年における両者のあつかい

は見事なコントラストを示している。ケインズの生誕100年が諸企画によって巷間で盛大に祝われているのに対し、シュムペーターのそれは気づかれたとしても、ひっそりとしたものでしかない。しかしシュムペーターこそ、経済理論や経済政策において思考を形成し、何が問題かを知らしめた人物だということが、21世紀を迎えるまでにますますはっきりするであろう、と。

シュムペーターとケインズ、いずれも昔からの仮説に挑戦した経済学者である。両者の主張は異なるが、不仲だったわけではなく、互いに認め合っていた。それぞれの立場から影響を与え合い、また理解ある批判者であった。政治的立場は対照的で、一般にシュムペーターは保守的、ケインズはラディカルとみなされるが、ドラッカーによればむしろその逆であった。ケインズの理論は自由市場への愛着を発端とするものにほかならず、今でいえば新保守主義に近い。これに対しシュムペーターは自由市場に深刻な疑問を抱き、社会主義者ではないにもかかわらず、マルクスを自らの師として経済学者のなかでもっとも高く評価していた。マルクスの出した解答はすべてまったくの間違いではあるが、正しい問題を提起したことこそ評価に値すると、シュムペーターはとらえたのである。

ここにおいてドラッカーはいうのである。かかる政治的立場や経済理論よりも深いところに、シュムペーターとケインズの真の違いはある。彼らは異なった経済的現実を見、異なった問題に関心を寄せ、経済学というものをまったく異なって定義した。これら両者の違いこそ、今日の経済世界を理解するうえできわめて重要なのである、と。このように課題を設定し、つづいてドラッカーは本論に入っていく。

ドラッカーによれば、ケインズは古典派経済学を捨てたものの、彼の経済学はいまだその枠組みにあるものだった。閉鎖された静的システムをあつかう均衡経済学であり、その中心的な課題は「いかにして経済の静的均衡を維持するか」にある。この点で、リカード以来の経済学の延長線にある。このように彼らと同じ問題を提起しながらも、しかしケインズが提出したのは彼らとは逆の解答だった。

では、まずリカード以来の伝統的な経済学、マルクスをふくめた19世紀の経済学の提出した解答は、どのようなものであったか。①財・サービスの「実物経済」(real economy)と貨幣・信用の「シンボル経済」(symbol economy)の関係では、「実物経済」が支配し、貨幣はそのヴェールにすぎない。②ミクロ経済とマクロ経済の関係では、個人や企業のミクロ経済が決定するのであって、政府はその際のわずかな食い違いを修正するが、できるだけ介入しない方がいいとされる。③需要と供給の関係では、供給が決定要因であって、需要はその関数である、というものであった。

これに対してケインズの提出した解答は、①「シンボル経済」が実体であり、財・サービスはそれに依存する影にすぎない。②マクロ経済すなわち国家経済がすべてであり、個人や企業には経済に影響を与えたり、方向づけることはできない。③資本形成・生産性・雇用などあらゆる経済現象は、需要の関数である、というまったく逆のものだったのである。

ドラッカーはいう。これらケインズの考えがすべて誤りだったということは、今では周知である。ニュー・ディール政策初期にもみられたことであるが、それはあくまでも特殊な場合にきわめて限られた範囲でのみ、当てはまることでしかなかった。ケインズ経済学はここ50年間にわたって経済理論と経済政策の指導原理であったが、典型的には1981年、82年におけるアメリカの経験でその非有効性を露呈した。個人や企業が突然預金を貯蓄からマネー・マーケット・ファンドへ、長期投資から流動資産へ、すなわち貨幣を流通速度の遅いものから速い

ものへと移すことで、あっさり金融システムを打ち破ってしまったのである。個人すなわちミクロ経済がシステムすなわちマクロ経済を打ち破ったことによって、ケインズ経済学は確実性を失ってしまったのである。

これにより経済学がケインズ以前の新古典派に戻るわけではないが、ドラッカーによれば、ケインズ経済学の非有効性はシュムペーターには最初からわかりきっていたことだった。そもそも均衡状態こそ健全かつ正常な経済だと前提する点で、ケインズは根本的に誤っているとみていたのである。シュムペーターにとって経済は機械的すなわちクロード・システムではなく、生物的すなわち永遠に成長・変化するものであった。経済学は均衡ではなく構造変化を中心的課題とすべきというのが、彼の主張であった。これこそ、イノベーションを核とする経済発展論である。陳腐化した古いものから、生産性の高い新しいものへと資源を移す企業家精神を、経済とりわけ現代経済の本質としたのである。かくみるかぎり、それまでの経済学的伝統において、ケインズがいわば「異端者」(heretic)であったとすれば、シュムペーターは「異教徒」(infidel)だった。

シュムペーターがいうイノベーションとは、「創造的破壊」である。きのうの資本設備・資本投資を陳腐化させてしまうがゆえに、経済が発展すればするほど資本形成が必要となる。経済の富創出能力、とりわけ今日の雇用を維持し明日の雇用を創出するためには、資本形成と生産性向上が必要となるのである。ドラッカーによれば、ここにおいて「利益」概念は、古典派経済学やマルクス、ケインズとは異なる意味づけを帯びることになる。利益は労働者からの搾取による剰余価値ではなく、逆に労働者の雇用や労働所得を生み出す唯一の源泉となるのである。企業のあげる利益のほとんども、存続のためのコストでしかなくなってしまふ。そしてかかる理解によって、資本主義は倫理的なシステムになることができるとする。

というも従来の理解では、利益はリスク負担に対するインセンティブとされる。とすれば、利益は嫌なことをさせるための餌でしかなく、道徳的に正当化することはできないからである。利益と道徳をどのように関係づけるか。この古典派経済学を悩ませ、マルクスをして資本家を不道徳と決めつけさせた難問が、シュムペーターの動的経済モデルでは解決されてしまう。人々の雇用・所得を生み出すためのものとして、利益は道徳的に裏づけられる。利益というものがもはや不道徳ではなく、道徳的な義務となるのである。

かくしてドラッカーはいうのである。まさにシュムペーターの動的経済モデルこそ、われわれが必要とする経済政策の出発点として唯一有効なものである、と。そこで問題となるのは、利益が十分かということである。雇用・所得を生み出すための未来のコスト、企業存続のコストを賄うのに十分な資本形成がなされているかである。つまるところ、これからの時代における経済理論や経済政策の中心問題となる問いを、すでにシュムペーターは投げかけていたのである。ドラッカーによれば、第一次大戦によって、貨幣と信用が経済を支配したことを、シュムペーターは誰よりも早く察知した。かかる「シンボル経済」の出現について、ケインズとシュムペーターでは受け止め方が違っていた。ケインズは貨幣的手段の利用によって、完全雇用・経済的な繁栄・安定という均衡状態の維持をもたらす経済学が可能になったと結論した。経済学の強力化・強大化を主張したわけだが、ドラッカーはこれを「経済学帝王」(economist-king)と表現する。対するシュムペーターは、「シンボル経済」の出現は専制を招くと結論した。「経済学帝王」のごときは経済学者の傲慢であり、力を行使するのは結局のところ政治家や軍人でしかない。国家は国民生産の配分を支配する力を得たが、これはケインズにとっては、社会

的公正・経済的な発展と安定、財政責任を実現する「魔法の杖」(a magic wand) だった。シュムペーターにとっては、インフレの防衛を政治すなわち政治家の自己規律 (self-discipline) にすべて委ねてしまうがゆえに、混乱を招くものでしかなかった。彼は政治家の自己規律というものに、きわめて悲観的だったのである。

シュムペーターは景気循環論の父の一人でもあり、「経済学者」として経済理論の発展に大きく貢献した。しかし第一次大戦後のシュムペーターがなした真の貢献は「政治経済学者」としてのものだ、とドラッカーはいう。ここでドラッカーが評価するのは、『資本主義、社会主義、民主主義』(42) である。同書でシュムペーターは、資本主義は自らの成功によって、また民主主義によって破壊されるとした。短期的には資本主義は、その経済的成功によって慢性的にインフレ圧力下におかれるとした。こうした主張をとらえてドラッカーは、シュムペーターを政治経済体制の行く末を見通した予言者として評価するのである。シュムペーターは政策が短期的にも正しくなければならぬことを知っていた、と。ひるがえって、短期の最適化に依拠したケインズには、現代の政策決定が短期的見方からなされるようになってしまったことについて、きわめて重大な責任があるとする。

かくしてドラッカーは、シュムペーターとケインズを西洋の二大哲学者の有名な対決になぞらえてむすぶのである。優秀で才気に満ちて魅力あふれるソフィストのプロタゴラスと、鈍重で醜いが英知あるソクラテスとの対話である。戦間期、ケインズほど優秀で才気に満ちて魅力あふれる者はいなかった。シュムペーターは平凡にみえたが、英知があった。才気 (cleverness) は日々を発展させるが、英知 (wisdom) は不滅である。短期的で才気に満ちて優秀な経済学・政治学が破綻してしまった今日、それらご都合主義的で人気あるものの長期的な結末を見ずえたシュムペーターこそ、適切なガイドである、と。

### III

以上が「シュムペーターとケインズ」(83) の内容である。論考として両者の特徴が端的に整理され、きわめて明快に論じられている。両者をあまりにもシンプル化しすぎて、専門の経済学者や経済学説史研究者の立場からすれば、おそらく多くの批判と異論が出るものと思われる<sup>7</sup>。しかしとにかく明快である。わずか10ページほどの小論で二大経済学者をこれだけ簡明にまとめ切ってしまう力量には、読者をしてむしろ感嘆の念すらおぼえさせてしまう。何よりも二大経済学者を対照的に際立たせて描き切ることに成功しており、専門的な議論をできるだけ平易かつ端的につかみたいビジネス・パーソンにとっては、十二分に満喫できたものにちがいない。まさに初出の『フォーブス』読者の思考を刺激する快作とあってよい。雑誌向けの読み物としてみれば、きわめて面白く読める小論である。

ただし両者の比較検討は相互補完的な理解ではなく、明らかにシュムペーター抛りの内容となっている。ケインズについては、「ケインズ — 魔法のシステムとしての経済学」(46) でのあつかい方と基本的に同じである。ケインズ経済学を魔法すなわち「まやかし」と断じたものである。ちなみに同稿も、本書『すでに起こった未来』(93) 本Ⅱ部「社会的様相としての経済学」で、部のむすび第10章として本稿の後に配されている。本稿「シュムペーターとケインズ」(83) について、以下いくつかの点から考察してみる。

ドロッカーは経済学の伝統においてケインズを「異端者」、シュムペーターを「異教徒」と表現している。経済の本質について、前者が経済学伝統の均衡状態すなわち静態的世界観をとりながらも、経済学の伝統とは逆の解答を提出したことをもって「異端者」とし、後者が経済学の伝統とは異なる不均衡すなわち動態的世界観をとり、ゆえに経済学の伝統とは異質の解答を提出したことをもって「異教徒」とするのである。「異端者」はいかに正統派から外れていようとも、大枠としてかかる信仰すなわち経済学の伝統内にある。しかし「異教徒」は信仰すなわち経済学の伝統とは次元をたがえる存在である。ドロッカーによる両者の評価は、およそその表現に集約されるといってよい。彼によれば、「異端者」ケインズは経済学に新たな流れをつくったが、経済学の伝統にとどまるものでしかなかった。これに対し、「異教徒」シュムペーターは経済学の伝統をまさに創造的に破壊し、経済学そのものを革新したということにほかならないからである。

その際シュムペーターとケインズ、またケインズと経済学の伝統を比較検討するツールとして、ドロッカーは「実物経済」と「シンボル経済」の二分法を用いている。貨幣・信用を表わす「シンボル経済」は今では「マネー経済」といった方がわかりやすいが、かかる二分法はヴェブレンの「産業」(industry)と「企業」(business)を想起させる。ドロッカーがこれを用いたのはかなり早く、初期の『産業人の未来』(42)からである。その後『新しい社会』(=『新しい社会と新しい経営』)(50)でも、とりあげられている。初期ドロッカーの総決算たる同書は「望ましい社会」実現のための方策として、企業の社会的制度化を試みたものである。明らかにヴェブレンに強く影響されているが、現代資本主義の特質を「シンボル経済」が支配的地位にあるとみた点で、ケインズとシュムペーターいずれも共通していたとする。ここにおいて前者は貨幣的手段によって経済を操作しうる強力な経済学が可能になったとしたが、後者は経済の舵をとる政治家の实情から悲観的だったという。つまり経済学の強大化によって、「尊大となった」か「謙虚なままだった」かで両者は明暗を分けたとドロッカーはみる。「尊大となった」ケインズは短期の最適化に走り、「謙虚なままだった」シュムペーターは長期的な結末を考えることを怠らなかつたからである。

総じてドロッカーがシュムペーターを高く評価するのは、「経済学者」としてよりも「政治経済学者」としてであった。長期的な視点すなわち資本主義の体制的行く末までも見通していた偉大な予言者だとするのである。そして彼の考えこそが今日必要なアプローチであるとして、かかる立場に依拠すべきことが強調されるのである。初期の『産業人の未来』(42)以来、ドロッカーはシュムペーターについて好意的な評価を与えてはいたものの、あくまでも部分的なものにとどまる。思想的展開を通観すると、まず『マネジメントの実践』(=『現代の経営』)(54)で誕生した「マネジメント」概念が、そもそもシュムペーターの動態的世界観にあることがみてとれる。ついで『変貌する産業社会』(57)でそれらしき色合いを強くしつつも、強力に意識されるのは後期の起点『断絶の時代』(68)からである。マネジメント誕生を経て、ポスト・モダンへ社会構想を転換したあたりから、シュムペーター的方法論が明確かつ強力に現われてくるのである。後期ドロッカーの焦点は知識社会すなわち不確実性増す社会にいかに対応していくかということにあり、変化をめぐる予測と行動が中心となる。ここにおいて自ら行為し、変化を自らのものとしていく動態的世界観が提唱され、シュムペーターをそのフォーマットとすることが強調されていくのである。本稿「シュムペーターとケインズ」(83)はまさにその頃のものであるが、かくみるかぎり初期における経済学の単なる否定から、後期には経済学

の批判的摂取ならびに共存へと転換していったといえることができる。

このようにシュムペーター的方法論を強調していく後期ドラッカーではあったが、ただしシュムペーターとの無視しえない違いがあることもまた明らかである。資本主義の行く末に関する見通し、社会体制的なビジョンである。シュムペーターは『資本主義、社会主義、民主主義』(42)において、「資本主義はその成功のゆえに社会主義となる」と結論した。本稿でドラッカーはそれを「資本主義はその成功のゆえに崩壊する」と表現するにとどめ、「資本主義が社会主義に移行する」というシュムペーターの結論を巧みに避けている<sup>8</sup>。社会体制の行く末を見通した予言者として評価するのであれば、この点にも言及すべきなのはいうまでもない。シュムペーターの意図する「社会主義」が何であるかという問題はさておくとしても、「経済学者」よりも「政治経済学者」として評価する以上、これでは画竜点睛を欠く感はぬぐい切れない。シュムペーターの方法論・世界観を採用する立場をとりながら、自ら都合が悪い部分、自ら否認する社会主義を肯定することにはふれようとしない。これはドラッカーお得意の手法であるが、かくみるかぎり本稿でのシュムペーター像は、ドラッカーによってかなり都合よくまとめられた側面は否定できない。

## おわりに

本稿でのケインズ批判にひるがえってみれば、「ケインズ — 魔法のシステムとしての経済学」(46)でのものと基本的に同じであった。47年前のドラッカー初期のものと同様に変わることなく、ケインズに一定の意義を認めつつも、その本質を魔法すなわち「まやかし」と斬って捨ててしまうのである。実に本稿での結論はケインズならびに経済学の伝統への懐疑であり、それらとは一線を画する流れとしてのシュムペーター的方法論の提唱である。ここに、不確実性の時代における創造的破壊すなわち主体的変革という視点と、マネジメントが大きく交錯してくるのである。シュムペーターが「経済学の異教徒」であれば、もとより「非経済学者」ドラッカーもまた「経済学の異教徒」であった。「異教徒」シュムペーターが経済学そのものを革新したように、「異教徒」ドラッカーは「非経済学」=マネジメントそのものを革新することでまた「異教徒」すなわち「社会生態学者」のアプローチを強化するのである。これこそ、「非経済学者」ドラッカーが二大経済学者を論じることの意義であった。つまるところ本稿「シュムペーターとケインズ」(83)は二大経済学者の存在を借りて、ドラッカーが自らの新たな「非経済学」を展開するものにほかならなかったのである。

その後シュムペーター的方法論を顕在化させていくなかで、なるほどドラッカーのマネジメント概念そのものが変わっていった。「変化もマネジメントの対象である」「変化はマネジメントしうる」といった類のことを、しだいにドラッカーは頻りに口にしようになるのである。かかるマネジメント概念の画期をなすが、『イノベーションと企業家精神』(85)であった。著書といっても論文集ばかりの80年代以降にあって、書き下ろしたる同書の充実度・完成度はきわめて高く、ドラッカーの並々ならぬ意欲に満ちあふれたものである。同書で不確実性下におけるマネジメントのベースは、より明確かつ強力にシュムペーター的方法論として組み直されたのであった。マネジメント誕生の書『現代の経営』(=『マネジメントの実践』)(54)、マネジメントの理論的完成の書『マネジメント — 課題・責任・実践』(73)に比してとらえれば、『イノベーションと企業家精神 — 実践と原理』(85)は「マネジメントの革新の書」といってよ

かろう。

かくみるかぎり本稿「シュムペーターとケインズ」(83)は同書へといたるドラッカーの思考プロセスにおいて、大きな転機ととらえることができる。ケインズをふくめた経済学の伝統的思考を整理し、それにかわるシュムペーターがいかにか「非経済学」すなわちマネジメントの新たなベースとなりうるかを確認させるものだったからである。ドラッカーは「非経済学者」でありながらも、経済学に強い関心を持ち注視しつづけた。その底流にあるのは、経済学への不信と斯学の枠組みを超えたシュムペーターの存在という、ある種のディレンマである。いかに経済学のオルタナティブとして誕生したマネジメントであっても、やはりドラッカーにあって斯学は切っても切れない関係にあったのである。

## 注

- 1 ドラッカーによれば、自身最初の投稿論文は「パナマ運河とその世界貿易における役割と題するもの」(The thesis on the Panama Canal and its role in world trade)とされる。1927年にドイツの経済季刊誌に掲載されたが、執筆したいはその1年前でハンブルグ滞在中に大学入試のために書いた論文だという。執筆当時のドラッカーは17歳。文筆家の原点としては、やはり経済学的なものにあったとみることができる。
- 2 ドラッカーの個人史については、ほとんどが『傍観者の時代』(79)と、ドラッカーへのインタビューをまとめた『ドラッカー 二十世紀を生きて』(牧野洋訳、日本経済新聞社、2005年→『知の巨人ドラッカー自伝』日本経済新聞社、2009年として文庫化)に負っている。これら以外では、日本語版への序文やアンソロジーをまとめるにあたって寄せた論考・序文などが補足的に語っていることがある。『ドラッカー 二十世紀を生きて』でのインタビューは最晩年になされており、すでに頭のはっきりしていた時のものではない。ともあれ、個人史の出所はほとんどが彼自身の言説となっており、その詳細な真偽のほどは必ずしも明確とはいえない。磯秀雄氏のドラッカーの人物像に対する指摘(『ピーター・ドラッカー研究序説 生きながらの死者の肖像』水山産業出版部、2011年)もあり、この点は注意を要するものと思われる。
- 3 厳密には同書に「非経済学」「非経済学者」の用語は登場しない。「価値の非経済的な秩序」(a noneconomic order of values)にもとづく「非経済至上主義社会」(noneconomic society)をめざすことがうたわれている。
- 4 文献②、90-91頁。
- 5 *The Ecological Vision: Reflections on the American Condition* (『生態学的なビジョン — アメリカの状況に関する描写』) (93)に先立って、その邦訳が『すでに起こった未来』(92)(ダイヤモンド社)の名で出版されている。ただし同邦訳書は全訳ではなく、全31論文のうち13論文のみが訳出されたものである。原書の構成は、以下のようになっている。

イントロダクション

### I 部 アメリカの経験

I 部へのイントロダクション

- 1 章 アメリカの特質は政治的である
- 2 章 カルフーンの多元主義
- 3 章 ヘンリー・フォード：最後のポピュリスト
- 4 章 IBM のワトソン：明日へのビジョン
- 5 章 アメリカ的画一性の神話

### II 部 社会的様相としての経済学

II 部へのイントロダクション

- 6 章 アメリカ政治の経済的基盤
- 7 章 経済理論の貧困
- 8 章 利益の幻想
- 9 章 シュムペーターとケインズ
- 10 章 ケインズ：魔法のシステムとしての経済学

Ⅲ部 マネジメントの社会的機能

Ⅲ部へのイントロダクション

11章 マネジメントの役割

12章 マネジメント：成功による問題

13章 社会的イノベーション：マネジメントの新たな局面

Ⅳ部 社会的機関としての企業

Ⅳ部へのイントロダクション

14章 企業倫理はありうるか？

15章 新たな生産性の課題

16章 製造の新理論

17章 敵対的買収とその問題点

Ⅴ部 仕事、道具、社会

Ⅴ部へのイントロダクション

18章 仕事と道具

19章 技術、科学、文化

20章 インドと適した技術

21章 最初の技術革命とその教訓

Ⅵ部 情報社会

Ⅵ部へのイントロダクション

22章 情報、コミュニケーション、理解

23章 情報、都市の未来

24章 情報にもとづく組織

Ⅶ部 社会と文明としての日本

Ⅶ部へのイントロダクション

25章 日本の芸術にみる日本の風景

26章 日本：成功による問題

27章 日本の成功の背後にあるもの

28章 日本と日本人への誤解

29章 日本人はいかに西洋化したか

Ⅷ部 なぜ社会は不十分なのか

Ⅷ部へのイントロダクション

30章 流行らないキルケゴール

あとがき ある社会生態学者の回想

6 ただしこのエピソードの信憑性には、首肯しかねる部分もある。くわしくは東谷暁『経済学者の栄光と敗北』朝日新書、2013年、334-335頁を参照のこと。

7 たとえば、東谷、前掲書336-338頁。

8 ドラッカー自身も『見えざる革命』(76)で、年金基金の台頭から「社会主義を労働者による生産手段の所有と定義するならば、アメリカこそ史上初のかつ唯一の真の社会主義国というべきである」とした。同書はドラッカーが唯一、資本主義・社会主義という社会体制を真正面からあつかったものである。ただし多分に大衆受けをねらった感が強く、「資本主義が社会主義に移行する」ということについてドラッカーが真剣に考えていたとはいいがたい。拙稿「「第三の道」論としてのドラッカー——非経済至上主義社会の希求とその終着地点」（北海学園大学経営論集第10巻第4号、2013年。）を参照されたい。

## Drucker 文献

- ① *Friedrich Julius Stahl; Konservative Staatslehre und Geschichtliche Entwicklung. Tuebingen: Mohr.* (33) (原題『フリードリヒ・ユリウス・シュタール；保守的国家論と歴史の発展』) (DIMMOND ハーバード・ビジネス・レビュー編集部訳『フリードリヒ・ユリウス・シュタール；保守的国家論と歴史の発展』所収は『DIMMOND ハーバード・ビジネス・レビュー』第34巻第12号、ダイヤモンド社、2009年。)

- ② *The End Economic Man; The Origins of Totalitarianism.* (39) (原題『経済人の終わり；全体主義の起源』) (岩根忠訳『経済人の終わり』所収は『ドラッカー全集』第1巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ③ *The Future of Industrial Man; A Conservative Approach.* (42) (原題『産業人の未来；ある保守主義的アプローチ』) (岩根忠訳『産業にたずさわる人の未来』所収は『ドラッカー全集』第1巻, ダイアモンド社, 1972年。なお同書は, その後の邦訳タイトル『産業人の未来』として一般に受容されている。)
- ④ *Concept of the Corporation.* (46) (原題『会社の概念』) (岩根忠訳『会社という概念』所収は『ドラッカー全集』第1巻, ダイアモンド社, 1972年。なお現在同書は, 上田惇生訳による邦訳タイトル『企業とは何か』として一般に受容されている。)
- ⑤ *New Society; Anatomy of Industrial Order.* (50) (原題『新しい社会；産業秩序の解剖』) (村上恒夫訳『新しい社会と新しい経営』所収は『ドラッカー全集』第2巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ⑥ *The Practice of Management.* (54) (原題『マネジメントの実践』) (上田惇生訳『現代の経営』上巻・下巻, ダイアモンド社, 1996年。)
- ⑦ *America's Next Twenty Years.* (55) (原題『アメリカのこれからの20年』) (中島・涌田訳『オートメーションと新しい社会』所収は『ドラッカー全集』第5巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ⑧ *The Landmarks of Tomorrow.* (57) (原題『明日への道しるべ；新たな「ポスト・モダン」世界に関するレポート』) (現代経営研究会訳『変貌する産業社会』所収は『ドラッカー全集』第2巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ⑨ *Gedanken für die Zukunft.* (59) (原題『明日のための思想』) (清水敏充訳『明日のための思想』所収は『ドラッカー全集』第3巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ⑩ *Managing for Results; Economic Tasks and Risk-taking Decisions.* (64) (原題『成果をあげる経営；経済的課題とリスクをとる意思決定』) (野田・村上訳『創造する経営者』所収は『ドラッカー全集』第4巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ⑪ *The Effective Executive.* (66) (原題『有能なエグゼクティブ』) (野田・川村訳『経営者の条件』所収は『ドラッカー全集』第5巻, ダイアモンド社, 1972年。)
- ⑫ *The Age of Discontinuity; Guidelines To Our Changing Order.* (68) (原題『断絶の時代；われわれの変わりゆく秩序への指針』) (林雄二郎訳『断絶の時代』ダイアモンド社, 1969年。)
- ⑬ *Management; Tasks, Responsibilities, and Practices.* (73) (原題『マネジメント；課題, 責任, 実践』) (野田・村上監訳『マネジメント』上巻・下巻, ダイアモンド社, 1974年。)
- ⑭ *The Unseen Revolution.* (→ *The Pension Fund Revolution.*) (76) (原題『見えざる革命』→『年金基金革命』) (上田惇生訳『見えざる革命』ダイアモンド社, 1996年。)
- ⑮ *Adventures of a Bystander.* (79) (原題『傍観者の冒険』) (上田惇生訳『傍観者の時代』ダイアモンド社, 2008年。)
- ⑯ *Managing in Turbulent Times.* (80) (原題『乱気流時代の経営』) (上田惇生訳『乱気流時代の経営』ダイアモンド社, 1996年。)
- ⑰ *The Changing World of the Executive.* (82) (原題『変貌するエグゼクティブの世界』) (久野・佐々木・上田訳『変貌する経営者の世界』ダイアモンド社, 1982年。)
- ⑱ *Innovation and Entrepreneurship.* (85) (原題『イノベーションと企業家精神』) (小林宏治監訳『イノベーションと企業家精神』ダイアモンド社, 1985年。)
- ⑲ *The Frontiers of Management.* (86) (原題『マネジメントのフロンティア』) (上田・佐々木訳『マネジメント・フロンティア』ダイアモンド社, 1986年。)
- ⑳ *The New Realities.* (89) (原題『新しい現実』) (上田・佐々木訳『新しい現実』ダイアモンド社, 1989年。)
- ㉑ *Managing the Non-Profit Organization.* (90) (原題『非営利組織の経営』) (上田・田代訳『非営利組織の経営』ダイアモンド社, 1991年。)
- ㉒ *Managing for the Future.* (92) (原題『未来への経営』) (上田・佐々木・田代訳『未来企業』ダイアモンド社, 1992年。)
- ㉓ *The Ecological Vision.* (93) (原題『生態学のビジョン』) (上田・佐々木・林・田代訳『すでに起こった未来』ダイアモンド社, 1994年。)
- ㉔ *Post-Capitalist Society.* (93) (原題『ポスト資本主義社会』) (上田・佐々木・田代訳『ポスト資本主義社会』ダイアモンド社, 1993年。)

- ②⑤ *Managing in a Time of Great Change.* (95) (原題『大変革期の経営』) (上田・佐々木・林・田代訳『未来への決断』ダイヤモンド社, 1995年。)
- ②⑥ *Drucker on Asia.* (97) (原題『ドラッカー、アジアを語る』) (上田惇生訳『P.F.ドラッカー・中内功 往復書簡① 挑戦の時』『P.F.ドラッカー・中内功 往復書簡② 創生の時』ダイヤモンド社, 1995年。)
- ②⑦ *Management Challenges for the 21<sup>st</sup> Century.* (99) (原題『21世紀に向けたマネジメントの課題』) (上田惇生訳『明日を支配するもの』ダイヤモンド社, 1999年。)
- ②⑧ *Managing in the Next Society.* (2002) (原題『ネクスト・ソサエティの経営』) (上田惇生訳『ネクスト・ソサイエティ』ダイヤモンド社, 2002年。)
- ②⑨ 『ドラッカー 二十世紀を生きて』(牧野洋訳, 日本経済新聞社, 2005年→『知の巨人ドラッカー自伝』日本経済新聞社, 2009年として文庫化)
- ③⑩ 『ドラッカー全集』全5巻, ダイヤモンド社, 1972年。  
第1巻 産業社会編 — 経済人から産業人へ  
第2巻 産業文明編 — 新しい世界観の展開  
第3巻 産業思想編 — 知識社会の構想  
第4巻 経営思想編 — 技術革新時代の経営  
第5巻 経営哲学編 — 経営者の課題